

令和元年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第5号  
(7月後半の発生予想)

令和元年 7月16日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】

葉いもち	量：やや少ない 程度：少発生	① 7月第1半旬から各地で稀～少発生が確認されたが、発生量は平年並に少ない。(±) ② BLASTAMによる感染好適条件が、7月10、12～15日頃に現れており、今後、発病の増加が見込まれる。(±) ③ コシヒカリBLの発病抑制効果は高く維持されている。(－) ④ 向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
穂いもち	量：やや少ない 程度：少発生 時期：並	① 7月上旬の葉いもち発生量は平年並。(±) ② イネの出穂期は平年並の予想。 ③ 向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
紋枯病	量：多 程度：少発生	① 初発確認は平年並、発生量は平年比多い。(＋) ② イネの生育量は指標値と比べ、草丈は並、茎数はやや多い。(±～＋) ③ 向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
稲こうじ病	発生量：並	① 前年の発生量は平年比やや少なく、伝染源量は平年比やや少ないと推定される。(±～－) ② 向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
ニカメイチュウ	量：やや多い 程度：少発生 (被害株率1～29%) 時期：やや早い (第1世代発蛾最盛期7月第6半旬頃)	① 7月上旬の被害株率は下越、新潟地域を中心に平年比やや多い。(＋) ② 第1世代幼虫の発生時期は平年比やや早い。 ③ 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。(±)
セジロウンカ	量：並 時期：飛来虫の次世代幼虫出現期は7月第3半旬～第4半旬頃。 (飛来9～13日後頃)	① 初確認は7月3日で平年比遅い。(－) ② 7月上旬の発生量は平年並。(±) ③ 梅雨明けまで飛来の可能性がある。(±) ④ 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。(±)
ツマグロヨコバイ	量：並 程度：少発生	① 7月上旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。(±)

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】（つづき）

斑点米カメムシ類	量：やや多い 時期：並	① 7月上旬の畦畔等雑草地での確認地点率はアカスジカスミカメが平年比やや高く、アカヒゲホソミドリカスミカメは平年比やや低いが、新潟、佐渡地域では両種とも平年比やや高～高い。（±～+） ② 水稻の出穂期は早生・コシヒカリとも平年並の見込み。（±） ③ 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。（±）
<b>【防除上の留意事項】</b> ① 斑点米カメムシ類は出穂したイネ科雑草に寄生し、増殖するので、これらの雑草が出穂する前に畦畔の草刈りを行い、水田侵入前の発生量を抑制する。 ② 水田内雑草（ノビエ、イヌホタルイ等）の繁茂・結実は、カメムシ類の水田侵入・増殖を助長するので早めに除去する。 ③ 品種ごとに出穂期を確認し、防除適期に合わせ確実に薬剤防除する。特に本年はコシヒカリにおける斑点米主要加害種であるアカスジカスミカメの発生がやや多いため、コシヒカリをはじめとする中生、晩生品種についても適期防除を徹底する。		
イネアオムシ （フタオビコヤガ）	量：やや少ない 程度：少発生	① 7月上旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ② 向こう1か月の気温、降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
コブノメイガ	量：やや少ない 時期：やや遅い	① 7月上旬の調査では未確認。（－～±） ② 佐渡市に設置したフェロモントラップでの初誘殺は7月8日で平年（7月3日）比やや遅く、7月11日までの累積誘殺数は5頭と少ない。（－） ③ 梅雨明けまで飛来の可能性がある。（±）

【大豆】

ウコンノメイガ	量：並 時期：並	① 前年の発生量は平年比やや少なかった。（±～－） ② 7月上旬にはほ場内で稀に幼虫の発生を確認。（±～+） ③ 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。（±）
<b>【【防除上の留意事項】</b> ① 幼虫の食害に伴う葉巻の発生は7月中旬頃から始まり、7月第6半句から急増する。齢期が進んだ幼虫には防除効果が劣りやすいので防除が遅れないよう注意する。 ② 防除時期は7月第6半句であるが、薬剤によって散布適期が異なるので、新潟県病害虫雑草防除指針に基づき散布する。		
食葉性鱗翅目幼虫 （ウコンノメイガ以外）	量：並	① ほ場内でツメクサガ等の発生が見られ、7月上旬の発生量は平年並。（±）。 ② 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。（±）

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】

<p>ナシヒメシンクイ</p>	<p>量：並～やや多い 時期：並 （第2世代成虫発蛾 盛期：7月第6半旬頃）</p>	<p>① 7月上旬現在、被害果は未確認で平年並。（±） ② 越冬世代成虫、第1世代成虫のフェロモントラップ誘殺数は平年比多かったことから、第2世代成虫も平年より多い発生が見込まれる。（+） ③ ももでの新梢被害（心折れ）の発生量は平年比やや多い（+） ④ 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想されている。（±）</p>
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 被害果を認めた場合は、土中深く埋めるなど速やかに処分して虫の密度を減らす。 ② 第3世代幼虫の防除時期は7月下旬～8月上旬と推察される。</p>		

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病虫害雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多  
いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。

②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発  
生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注2： 「予報の根拠」の、(+)は発生量を増加させる要因、(-)は発生量を減少させる要因、  
(±)はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：6月1日～8月31日】

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使  
きましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の  
生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、7日間の止水を厳守し、落水しないようにしましょう。

新潟県病虫害防除所業務課

電 話：0258-35-0867

F A X：0258-35-7445

U R L：www.pref.niigata.lg.jp/bojo

【参考】北陸地方 1か月予報（7月13日から8月12日までの天候見通し）  
 （新潟地方气象台：令和元年7月11日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。

2週目は、平年並の確率50%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	30	30	40
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	40	30

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（7月13日～7月19日）	30	50	20
2週目（7月20日～7月26日）	20	50	30
3～4週目（7月27日～8月9日）	20	40	40